教育長だより　No. 8

２０２１年6月１１日

教室の前面掲示は？

～ 県教委人事主事と学校をまわって気づいたこと ～

６月７日（月）から県教委の人事主事（教職員課）の先生と市内の小中学校の訪問を始めています。（教職員課とは県費教職員の採用や人事異動、管理職昇任や人事評価、処分などを行う部署です。）人事の仕事は、まずは学校現場にどんな人がいるのかを把握しなければなりません。そのための訪問です。（野洲と守山の担当が小島先生）新年度が始まって２か月、新転任の先生を中心に各学校での活躍ぶりを見にまわっています。

この訪問では学校の全教室を訪問するため、学校による違い（大規模校では学年による違い）がよくわかります。わずか２～３分（大規模校では１～２分）の教室訪問ですので、先生方の授業展開まではわかりません。それより、教育環境（教室経営）の違いに目を見張ることが多いです。例えば、特別支援教育で大事にしている『前面掲示をなくすこと』。つまり、「子どもの集中を妨げる掲示は極力なくしましょう。」ということです。教室の前の黒板上はもちろん、そのまわりの掲示板や上下の壁面も。小学校でいえば、前の窓側にある先生用の机や戸棚の「目隠し」もそうです。それを見ると、「配慮がすばらしいなあ。」と思います。

なぜかというと、みなさん『ウォーリーを探せ』という絵本をご存じでしょうか？　見開きいっぱいに細かい絵が描かれたページの中から、シマシマのシャツを着た小さなウォーリーという男の子をを探す絵本です。ゴチャゴチャの中から見つけ出すのは、すごく難しいゲームです。他にも同じような絵本で『めっけ』というタイトルだったと思いますが、小さなおもちゃがそれこそページいっぱいに何百個も描いています。そして、その中からラッパなら同じラッパをいくつあるか探すというものもあります。黒板や前面掲示は、ちょうどこのゲームのようにどこを見ていいかわからない、ゴチャゴチャな状況と同じです。特に、発達障がいをもつ子にとっては授業で大事なところを見つけにくくしているのです。「周りの景色が子どもの集中を妨げている」とも言えます。（「はい！　ここを見て。」と言う前に、前面掲示をなくすと子どもたちは集中しやすいです。）

ところで、昔は特別支援教育って知らない時代でしたから、よく黒板の隅に「宿題のメモ」や「時間割変更」などが書かれていました。また、小学校では発表者を板書する手間を省くための一人ひとりの磁石シールの名前札をきれいに並べたりもしていました。さらには、今では人権問題にあたると思いますが、忘れ物をした子の名前などを書いているクラスもありました。そして、黒板の上の一番目立つ所には、学年や学級目標、スローガン、あるいは「発表のしかた」などが掲示されていました。黒板の両サイドには、給食や掃除の当番表や学級・学年通信、給食の献立表など、とにかく子どもに知らせたい情報をぎっしりと掲示していたものです。こんな教室、今では考えられない風景ですよね。先日伺った一つの学校ではどの教室も前面掲示が「なにもない」という状況でした。それこそ『目を見張る』ようなすっきりした光景でした。すばらしかったです。

そうそう、私が隣の近江八幡市から転勤してきた平成２４年、夏の全員研修会で野洲北中学校が発表をされたのをすごく新鮮に感じたことがあります。特別支援教育の校内研究の一環で、学校あげて教室の前面掲示の見直しを図っているという内容でした。「野洲は、人権をベースに特別支援教育に力をいれているんやな。しかも、中学校で。」と感心したものです。

それから１０年近くになります。人事異動で市内外の教職員が入れ替わり、もちろん当時のままとはいかなくなっていると思います。そして、あの時以上に国を挙げての特別支援教育の推進が求められています。この例は日常の些細なことかも知れませんが、子どもの授業集中を大事にしている点として再確認したいですね。

教室の前面掲示、あなたのクラスではどうしていますか？